

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520009
 研究課題名（和文） プラトンからヘレニズム哲学に至る知の基礎づけと演繹的・非演繹的体系の研究
 研究課題名（英文） STUDIES ON THE FOUNDATION OF KNOWLEDGE AND DEDUCTIVE AND NON-DEDUCTIVE REASONING FROM PLATO TO HELLENISTIC PHILOSOPHY
 研究代表者
 金山 弥平 (KANAYAMA YASUHIRA)
 名古屋大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号：00192542

研究成果の概要：ギリシアの演繹的体系の発達は、文字文化の普及による自由な批判精神、民主主義の発達、真正の説得技術の探求、および文字による思考の明確化という観点から理解されるべきである。知の基礎づけの問題は、ギリシアにおいては、幸福・善き生の探求という動機のもとで展開されたものであり、認識論・論理学と言っても、それは価値と無縁の学問ではなかった。このことが公理—演繹体系以外の方法論の発展を促した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,800,000	450,000	3,250,000

研究分野：古代ギリシア哲学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：プラトン、ヘレニズム哲学、公理—演繹体系、問答法、善のアイデア、メタファー、基礎づけ、相対主義

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者自身の研究の二本柱—(1)プラトンの認識論・方法論と(2)古代懐疑主義—to発するものである。

(1)プラトンが用いる最重要の方法論、仮設法は、古代ギリシアにおいて広く、科学、とくに医学と幾何学において用いられていた。プラトンはそれを哲学的に整備したのである。研究代表者は、哲学の領域だけでなく、医学・数学・懐疑主義における同方法の用いられ方を総合的に研究することを通して、古代哲学および古代科学における理論と経験の対立の問題、また知識確立のための仮設の

有効性の問題、そして古代の哲学者、科学者たちが求めた知の体系性の問題を研究した。この研究において得られた重要な知見のいくつかを列挙すると次のとおりである。(A) 仮設法は、『メノン』において知識の不可欠の構成要素とされた「原因・根拠の推理による縛り付け」のためにプラトンが採用した方法であるが、たんに明示的に使用されている対話篇のみならず、明示的に言及されていない場合でも、プラトンがその哲学活動を通して重視しつつけた方法である。(B) この仮設法への反省的思考が、プラトンの知識観を形成していった。(C) 知識到達の可能性を保証

するために『メノン』においてはじめて提示される想起説もまた、仮設法と関連づけて理解されなければ、十全には理解されない。(D)『テアイテトス』の知識定義の試みとその失敗の意義も、想起説、および仮設法と関係づけることにより、新たな光のもとに眺めることができる。

(2)古代懐疑主義においては、セクストス・エンペイリコスによるドグマティスト論駁の著作『学者たちへの論駁』(論理学者たちへの論駁、自然学者たちへの論駁、倫理学者たちへの論駁)(京都大学学術出版会)の翻訳に携わってきた。セクストスは、懐疑主義の立場から、ストア派、エピクロス派、またそれ以外にも断定的に知を自認する哲学者たちの哲学体系を根底から突き崩そうとした。彼らは、哲学者たちによる「知の基礎づけ」を問題視し、考えられるかぎりのあらゆる反論をそれに対して加えたのである。

これら(1)(2)の背景のもとに、広く「プラトンからヘレニズム哲学に至る知の基礎づけと演繹的・非演繹的体系の研究」と題して行なったのが、本研究である。

2. 研究の目的

自分自身の認識がたんなる思いなし・信念にすぎないか、それとも確実な認識・知識であるのか、という問題は、古代ギリシアに始まり、哲学の全歴史を通じて一貫して哲学者たちが問い続けてきた問題である。とくに、確信に裏打ちされた行動を取りつつ、自らを「無知」の状態に置き続けたソクラテスの言動によって「本当に知るとはいかなることであるのか」という問いを突きつけられたプラトンは、その著作『メノン』においてこの問題を探求する過程で、今日の知識の定義「知識とは正当化された真なる信念である」に通じる思想——知識とは、真なる思いなしが根拠の推理によって縛りつけられたものである——、「生得知」「潜在知」と類似した思想——想起説——、知識に至る方法としての仮設法などを展開し、彼以降の、アリストテレス、ストア派、エピクロス派、懐疑派による本格的認識論の道筋を切り拓いた。彼らの解答はそれぞれ異なるが、しかし共通することがある。それは、(1)彼らが、伝聞、経験その他の単純な正当化では満足せず、「知識」を一つの体系として捉えようとしたこと(知識の体系性)、(2)その体系を支えるものとして、最も確実な基盤を置こうとしたこと(知の基礎づけ)である。

しかしそれでもなお、彼らの答えは、次に示すように非常に多様であった。

①プラトンはイデア論という普遍実在論を示し、経験からできるだけ離れ、純粹の思考・理性に頼り、仮設法、問答法によってイデアの知に至ろうとした。

②アリストテレスは内在形相の立場からイデアを斥け、問答法はありそうな議論を展開するものとみなし、学問の理想を、名辞論理学に基づく三段論法的・演繹的な論証の体系に求めた。

③ストア派は、普遍にはいかなる存在性も認めない徹底的な物質主義・個物主義の立場から、認識の基盤を感覚的経験——把握的表象、先取的認識(プロレープシス)など——に求めた。また定義を重んじ、その問答法において、命題論理学によって論証的な知を演繹的に構築する理想を示した。

④エピクロス派は、ストア派と同じく先取的認識(プロレープシス)を重視したが、しかし知識に至る手段としては、定義よりむしろ、人間が自然的に発する名前の方を優先し、明瞭な感覚的経験から、不明瞭な知識(彼らの原子論の体系)に至る巧妙な帰納法の方法論を展開した。

⑤懐疑派(アカデメイア派、ピュロン主義)は、これらの哲学者が立てるいかなる原理も、彼らが要求するような確実性・明瞭性を満足させるものではないとして斥け、彼らの知の体系を突き崩した。また探求の方法についても、問答法、仮設法、演繹法、証明法、帰納法など、ドグマティストたちが誇りとするものはすべて無効であるとして斥けた。

彼らのあいだの諸概念を共有しつつも微妙に異なる相違は、(A)人間の認識能力として感覚経験と理性のどちらを重視するか、(B)方法論として演繹と帰納のどちらに重きを置くか、という認識論的なスペクトルだけではなく、(C)神と非理性的動物の間で人間はどこに位置づけられるか、(D)全宇宙は、摂理・神のような善なる原理によって管轄されているか、(E)そうした宇宙の中で、人間に知識獲得の道が保証されているか、といった倫理的、自然学的なスペクトルのもとでも考察されるべきものである。

本研究が目的としたのは、一つには、自然学、倫理学を含む哲学全体の広い思想的文脈の中で、「知の基礎づけ」「演繹的・非演繹的体系」という認識論的・論理学的主題について、プラトン、アリストテレス、ストア派、エピクロス派、懐疑派(アカデメイア派、ピュロン主義)がどのように考えたか、という問題を、上記(A)~(E)の論点との密接な関係のもとに考察するとともに、またこれらの哲学者同士の思想的受容・批判の関係をも視野に入れ、彼らのそれぞれが、先行哲学者ないしは同時代の哲学者の思想とどのように対決し、自らの立場を具体的にどのような形で構築していったか、という問題を解明することであった。

3. 研究の方法

研究の方法として採用したのは、基本的に、

古代哲学研究の常道である文献学的方法であった。その際の2本の柱は、(1) かつて『パイドン』『テアイテトス』の認識論について、*Oxford Studies in Ancient Philosophy* に発表した二つの論文を発展させ、『メノン』のパラドクス、『国家』の知識探求の方法なども視野に入れていくプラトン認識論の探求、(2) 古代の懐疑主義者セクストス・エンペイリコスの著作の翻訳を進め、全著作の翻訳を行ない、その中で得られた知見をまとめていくことであった。

4. 研究成果

知の基礎づけと言っても、現代の科学が理想として掲げる公理—演繹体系を古代哲学にそのまま当てはめることはできない。当時の哲学者たちの関心は、論理的体系の整備にはなかった。むしろ彼らの関心は、善き生き方、幸福を達成するための生き方を示すことにあった。それはプラトン、アリストテレス、ストア派、エピクロス派、また古代懐疑主義すべてに共通した立場である。一般に言えることであるが、古代社会など異文化の理解にあたっては、われわれはオブザーバーの観点を押しつけるべきではなく、登場人物の観点到立つべきである。そのことは古代哲学の認識論、論理学を見る場合にも当てはまる。そのとき次のように言うことができる。

ギリシアにおいて文字文化が普及し、またそれによって思想を目の前に顕在化させ、比較することが可能になったとき、過去の諸思想、同時代の諸思想、さらには自ら抱いている立場を比較し、相違を明確に捉えることができるようになった。とくにアルファベットという簡単に学べる表音文字の普及は、ギリシア人の多数が書物に直接接し、また政治的場においても、自らの意見を、文字を通して直接社会に訴えることができる状態をもたらした。それは自由と民主主義の定着に貢献することになる。

また文字が普及するまでは、瞬間、瞬間の主張は、つねに現在の指示対象との関係で理解されるしかなかった。その意味で過去から伝えられたものも、過去の事実であるよりはむしろ、現在の事実に合わせて改変された過去でしかなかった。ところが文字が普及すると、事実として伝えられたものや、抱かれた思想を記録することができるようになる。このことは、過去の主張と現在の主張を、同時に一つの空間の内に並べ、比較することができるようになったことを意味する。過去が過去として成立し、歴史な客観的な記述という一つの理想が現われることになる。トゥキディデスはそのような「歴史」を目指した。

過去と現在の比較は、一つの語りの中でも成立しうるし、また一つの世界の中での比較でもありうる。前者は、自分の論述の論理性

の意識をもたらす。すなわち、ここに論理学が発展する。後者は、社会における伝統対革新の対立をもたらす。社会におけるこの保守と新思想の対立は、二つの方面で説得の技術としての弁論術の重要性を増し加えた。すなわち、ギリシア民主主義社会における自由な教育と関連して、社会的地位を築くために、弁論術は重要になる。またギリシア宗教を基盤とする社会秩序の維持の問題と関係して、新思想と保守勢力の対決の中でも、説得の技術は自らの身を守る手段として重要な意義をもつことになる。

説得は、他者の説得も意味すれば、自己の説得も意味する。前者の場合、ギリシアにおいては、弁論術の発展の中で、単なる見かけの説得と、本当の説得の区別が意識される。後者が目的とされるとき、もっとも確実な説得の方法—論駁不可能な説得の方法—としての数学的な公理—演繹体系の発展の道が開かれる。他方、自己に対する説得は、善き生き方・幸福を目指すギリシア哲学の環境の中で、善という価値・徳の領域において自ら納得できるような真理の探求を促進するものとなる。

それゆえ、知の基礎づけという場合、ギリシアにおいては目的論的視点が入ってこざるをえない。プラトンが『国家』において、太陽の比喻、洞窟の比喻、また《線分》による知と存在の諸段階を示すなかで、数学的公理—演繹体系の重要性を指摘しつつも、同時に数学的学問の上位に、善を頂点とする体系を把握する方法として問答法を置いた事実は、この観点から理解されるべきである。

価値と無縁の存在、人間が抱く関心と無縁の客観的真理の探求というものはありえなかった。例えば、ストア派の論理学にしても、「論理」に相当するロゴスは、言葉、理性（人間の理性、宇宙を統轄する理性）であり、その意味で、宇宙における価値の実現を目指す目的論的な概念であって、彼らの論理学も、高度に目的論的な意味合いを帯びていた。実際、人間の歴史を全体として眺めるとき、人間の関心から切り離された客観的真理の探求という考え方それ自体が、現代の特殊な考え方—しかも主張とは裏腹に、実際に実現されているとは限らない立場—でしかない。このことは、現代の科学哲学においても、知識社会学のいわゆる「ストロング・プログラム」の問題、实在論と構成主義の対立、そしてその中で新たに展開されている調停の試み—例えば R・N・ギャリーのパースペクティブイズム—などとも関係してくる。

この時、見失ってはならないのは、現代のこうした論争においては、相対主義的立場を支持する目的で人間の認識のパースペクティブ性が強調される傾向にあるが、古代哲学においては、相対主義を批判する論者も、人

間の認識のパースペクティブ性を強調した点である。このことは、古代懐疑主義の発展と関係している。現在では、相対主義と懐疑主義の関係が曖昧であって、例えば倫理的懐疑主義者は、道徳的価値は存在しない、と主張する傾向にある。しかし古代の哲学者からすれば、それは相対主義であって懐疑主義ではない。古代哲学においては、相対主義への反対勢力は、懐疑主義者も含めて、倫理的実在、および科学が対象とする種類の実在の客観的存在を認めた上で、善き生を送るためにそこに向けて接近しようとしたのである。

相対主義者は、自分はずでに、自分の世界の実在に到達しているとする。それに対して、知を基礎づけ、演繹的な体系構築を目指す哲学者たちは、プラトンをはじめとしてヘレニズム哲学に至るまでの主たる哲学者たちのいずれにおいても、ソクラテスが主張したような「無知の自覚」を、真理への接近の原動力、彼らの哲学のモットーとしていた。

プラトン、アリストテレス、エピクロス派、ストア派のいずれにおいても、知というのは、諸々の命題からなる体系であり、公理—演繹体系は目標としての確固たる位置を占めていた。しかしその体系の原理となるものの実在性と接近の難度には、学問領域に応じた相違がある。例えば、ある概念を定義する場合でも、社会の規範的な価値の概念と、科学的・数学的な概念とでは、明らかに難度は異なる—前者が困難、後者が容易である。また科学的な諸学問の内部でも、数学のように抽象性において優れた学問と具体的事象に密着した学問では、前者は容易、後者は困難という相違がある。そのため、原理到達の道筋において数学と、自然学や倫理学とでは事情が異なってくることになる。そのことは、分析論において学問の理想的体系を示したアリストテレスが、その実際の哲学的探求においては問答法的な手法を用いていたという事実にも反映されている。

演繹—公理体系を構築する試みにおいて、ギリシア数学は、ユークリッド『原論』において一つの完成を見たが、これは、最も確実な説得法を目指すギリシアの知的環境に起因するとともに、数学という領域において、原理の自明性・単純性は、比較的容易に認識可能であったという事情にもよる。もちろんどんなに自明であろうが、それに対して疑問を投げかけることは可能であり、とくにギリシアの自由な文字文化においては、『原論』の第5公準（要請）の自明性に対して疑問が投げかけられた。そして、同公準証明の試みが後に非ユークリッド幾何学の展開に通じたことは、周知の歴史的な事実である。

しかし原理到達の困難は、自然学、倫理学においては、数学的学問のそれとは比較にならない。プラトンは問答法を数学の方法の上

位に位置づけたが、同時に、数学的諸学問を、問答法のための訓練ともみなした。これは、原理到達の難度の相違と、それら二つの領域において求められる認識の体系の同構造性を反映したものである。

プラトンにおける原理到達のための基本的方法は、仮設法である。問答法の仮設法と数学の仮設法に関しては、ともすると前者の上昇の過程と後者の下降の過程が強調されがちであるが、しかし、後者においても原理到達のための上昇の過程があることは見過ごされてはならない。またプラトンにおいて重要なのは、二つの仮設法が同じ構造をもつだけでなく、数学の諸仮設が、問答法の諸仮設によって基礎づけられるということである。これは現代の立場から見れば、価値を扱う学問領域と、価値中立的であるべき学問領域の完全な混同に見えるかもしれない。しかし、プラトンにとっては、諸々の価値の概念（それは「日常的概念」と呼んでもよい）と、数学的諸概念（「科学的・学問的概念」と呼んでもよい）の理解は相互補完的に働くものであった。すなわち、後者における訓練が前者の理解を助ける予備学問であったように、また前者の理解も後者の理解を深める役割を果たしていたのである。

しかし、先にも述べたように、数学においては原理の理解は容易であっても、問答法が扱う領域においては事情が異なる。そこでプラトンにおいては、アナロジーを用いた方法、「例」を用いる方法、あるいはメタファーを用いる方法が決定的に重要になってくる。それらはすべて二つの似たものを捉え、簡単なものの内においてその構造を見極めることにより、困難なものの構造を解明する方法である。もちろん似たものがたんに符合しているというだけでは、知に至る方法として不十分である。しかしプラトンには、自然界のすべては、お互いに同族・親近的な関係にあるという確信がある。それゆえ、必要とされるのは、似ている原因が、同一の本性の共有にあるということの確実な把握である。その把握に至るための方法が、『パイドロス』や『ピレボス』で紹介され、また『ソピステス』や『ポリコティコス（政治家）』で利用されている総合（総観）と分割の方法であった。

この方法は『国家』でも言及されており、さらに魂と国家のアナロジーという局面でも、何らかの仕方で用いられていることが予想される。すなわち、魂と国家はたまたま構造が似ているというのではなく、そこにはある種の実質的な同族性が存在すると言うべきであろう。同じことは、数学における諸命題の繋がり、善を頂点とする諸命題の繋がり、類似性についても言うことができる。それらは単に、自明の諸原理に基づく整合的な体系という点で類似しているにとどまら

ない。数学の原理となっている命題が、等しさに関わるものであり、また等しさは、正義の中核をなす概念であるという意味において、両者は類似しているのである。プラトンの「想起」も、この本質的類似性の把握と関連付けて理解されるべきである。実際『メノン』において「想起」が導入される時、プラトンは明確に自然の同族性に言及している。また総合・分割の方法が用いられる『ポリコティコス（政治家）』において説明され、活用されているパラダイグマの方法の有効性も、この同族性に由来すると考えられる。

さらに、プラトンによるメタファーの活用も、この観点から考えられるべきである。発見にせよ、あるいは説得にせよ、それは今まで気付かなかった関係に気付くこと、あるいは気付かせることである。プラトンの場合、それは、他者との関係では、対話（ディアロゴス）という形態をとり、また自己との関係では、対話（ディアロゴス）の内面化された思考（ディアノイア）という形態をとる。いずれにせよ、そこでは、異なる領域に位置するとそれまで考えられていたものが実際には同族であったことを示す試みが行なわれる。

数学を基礎づけるものとして問答法をその上位に置くプラトン思想は、現在でも言わば常識外れの発想であるが、古代においても、『国家』における哲学者への一般の評価が示すように、日常的立場に立つかぎり理解不可能な見解であった。そのことは、洞窟の住人と外の世界に憧れる哲学者の対立が如実に示しているところである。常識と異なる見方の正当性を説得しようとするれば、言葉がもつ柔軟性を駆使して、他の領域との連絡をつけ、別の領域での同一構造に基づいて理解させるしかない。ソクラテス自身、問答相手が卑俗として嫌うような例を用いてそれを行なったし、またプラトンも、さまざまなメタファーを駆使して、新たな、より善い生き方に通じるうる世界を示そうとするのである。

言語というものをどう捉えるか、という点に関して、一方には、(A) それを主観的なものとして捉える立場、他方には、(B) それを一義的・客観的なものとして捉える立場がある。またそれと対応するかたちで、メタファーについても、一方には、(a) それを感情を誘発するだけの詩的表現として捉える立場、他方には、(b) さらなる言い換えによる理解を拒むような究極の表現として捉える立場がある。プラトンが、メタファーを用いるとき、彼は(a)も(b)も採用しない。むしろ、聞く者の関心を掻き立て、新たな理解の枠組みに気付かせ、そして探求を促すものとして、メタファーを理解するのである。そしてそのような理解に立った彼のメタファーの活用は、彼の執筆活動そのものでもある。すなわち、

言語に関する見解として、彼は(A)も(B)も採用しない。彼にとって生きた言語・言論とは、知的理解の接近を許さない主観的なものでもなく、また硬直した一義的なものでもなく、中核となる慣れ親しんだ世界から出発して、別の世界を垣間見させる手段である。もちろん、どこまでが慣れ親しんだ領域であり、どこからが別の世界であるか、その境界を定めるはっきりした線は存在しない。そこにあるのは連続的なスペクトルでしかない。そして慣れ親しんだところにとどまるなら、その言語は(B)となるであろうし、他方、慣れ親しんだ世界から余りにも乖離した世界を示そうとするなら、(A)になるであろう。その意味で、彼にとって言語は本質的にメタファー的である。あるいは、字義的とメタファー的の区別は、彼にとって意味をなさないと言ってもよい。そのような言語を駆使して、彼は新たな探求の道を自分のためにも、また人のためにも開こうとする。

このメタファーの駆使こそが、プラトンにとって『パイドロス』で言及される生きたロゴスであり、真の弁論術であり、そしてプラトン自身の対話篇執筆である。実際、プラトンはその対話篇中で、想起、三部分をもつ魂の姿、太陽、洞窟などの活用によって、洞窟の外の世界のあり方を、ロゴスの中に映し出し、そして読者のさらなる考察を促している。プラトンのドグマとして捉えられるもの（例えば、イデア論や、理想国家の思想など）に着目するなら、後の哲学の歴史がプラトンへの脚注であるというホワイトヘッドの発言は的外れなものとなるであろう。しかし、考察を掻き立てるメタファーという観点から考えるなら、彼のコメントはまさしく的確である。

以上が、プラトンを中心とする研究成果である。またこれとは別に、古代懐疑主義者セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』の翻訳を進めた。ここではその具体的成果を詳論する余裕はないが、一つ指摘しておくなら、古代懐疑主義、またその内のアカデメイア派懐疑主義の研究は、プラトンをドグマティストとしてではなく、メタファーを駆使した探求者として捉える方向での解釈を非常に助けるものであった。

以上のことを総合して、次のように言うことができる。「研究の目的」の欄で示した(A)～(E)のうち、古代哲学者にとって彼らの探求を導いた重要なポイントは、神的要素をもった人間が宇宙における善なる原理を見極め、倫理的・自然学的に生を導く有効な知の体系を見出すことであった ((C)～(E))。その目的のために彼らは、感覚であろうが理性であろうが、演繹であろうが、他の方法であろうが、あらゆる手段を駆使して探求を行なったのである ((A)～(B))。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 金山弥平「ヘレニズムと近現代の哲学を動かした波:「オシツ・オサレツ」(pushme-pullyou) 関係のなかの個人・社会・宇宙」『アルケー』、第17号、pp.1-17、2009年(近刊)、査読有
- ② 金山弥平「What is It Like to Know Platonic Forms?: Knowing Meno, the Power of Dialogue, and the Cave and the Line」, Journal of the School of Letters, Nagoya University, pp.1-15、2008年、査読有
- ③ 金山弥平「交響するコスモス、古代ギリシアの哲学の立場から—説明相互、種相互、および物質における連続性の問題—」『平成18~19年度科学研究費(萌芽研究)研究成果報告書「言語表象と脳機能から見た環境生成のメカニズム」』 pp.199-220、2008年、査読無
- ④ 金山弥平「心理的・社会的・宇宙的環境におけるコスモス(秩序)の構築—古代懐疑主義とプラトン—」『平成18~19年度科学研究費(萌芽研究)研究成果報告書「言語表象と脳機能から見た環境生成のメカニズム」』 pp.433-444、2008年、査読無
- ⑤ 金山弥平「プラトン対話篇における正と負の感情—プラトン感情論に向けて—」『哲学フォーラム』(名古屋大学哲学研究室)、第5号、pp.25-34、2008年、査読無
- ⑥ 金山弥平「プラトンとアルキュタス—正方形と立方体の倍積問題—」『哲学フォーラム』(名古屋大学哲学研究室)、第4号、pp.53-62、2006年、査読無

[学会発表] (計4件)

- ① 金山弥平「ヘレニズムと近現代の哲学を動かした波—「オシツ・オサレツ」(pushme-pullyou) 関係のなかの個人・社会・宇宙—」関西哲学会(第61回大会)、2008年10月19日、京都大学、吉田キャンパス
- ② 金山弥平「交響するコスモス—人類5000年の宇宙論:古代ギリシアの哲学の視点から」、「言語表象と数理的表象に基づく宇宙論の再構築」シンポジウム、2007年9月25日、名古屋大学、文系総合館カンファレンスホール
- ③ 金山弥平「プラトンの想起、メタファー、似像」handai metaphysica 研究例会(第5回)、2007年8月3日、大阪大学、待

兼山会館

- ④ 金山弥平「言語的・社会的・宇宙的環境の中での可塑的中枢の自己形成(あるいは崩壊)—現代テクノロジーの諸前提に対する、古代ギリシアおよびユダヤ・キリスト教の人間理解からの批判的アプローチ—」「環境哲学」研究会、2006年6月28日、名古屋大学、文学研究科大会議室

[図書] (計2件)

- ① 金山弥平、中央公論新社、『哲学の歴史第2巻、古代Ⅱ、帝国と賢者、地中海世界の叡智』(共著)、2007年、pp.175-238, pp.261-264
- ② 金山弥平、金山万里子、京都大学学術出版会、セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁2、論理学者たちへの論駁』(全体にわたる共訳)、2006年、総頁539頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金山 弥平 (KANAYAMA YASUHIRA)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 00192542